

横浜の〈スラム〉をなぞる／に問われる

阿部 安成

要 約

かつて、「横浜貿易新報」で「細民」や「乞食谷戸」の探訪記事が掲載されたことがあったが、いまでは、横浜の歴史にそれらが書かれることはあまりない。横浜が都市としての発展、遊楽をめぐる繁栄という観点から記されるとき、そこから排除されたものたちの一斑を〈スラム〉として代表させてみる。すると、〈スラム〉は社会事業史のなかで、過去の事業家たちが書き残した悲惨な像のままになぞって記されてきたことがわかる。わたしが〈スラム〉について書くときは、〈スラム〉をめぐる記述をとおして、歴史を読んだり書いたりするときの注意事項を確かめてみることとなる。本稿は、すでに公表した論考「都市の縁辺を考える」とあわせて読んでいただきたい。

はじめに

横浜というフィールドにおいて、その歴史はどのよう
に書かれてきたのだろうか。横浜の歴史の書き方には、
ひとつの型がある。おおまかにいえば、横浜はそのひ
つこの型にそってとらえられ、あらわされてきた観がある。
発展しつづける開港都市、ゆえにそこは快楽と愉悦が満
ちる横浜となる、という定型である。横浜にふさわしい

発展と娯楽が製作されてゆくなかで、同時に、追撃され
ようとしたもの、消去されようとしたもの、反位におか
れたものたち——こうしたものたちの一片をかたちづく
るものとして、〈スラム〉という場所を設定してみよう。
その〈スラム〉は、横浜（ないしは神奈川）の社会事業
史が書かれるときに観察の対象となった。

この小文ではおもに、一九世紀末から二〇世紀にかけ
ての横浜の社会事業史において、〈スラム〉をめぐる読
み書きがどのようにおこなわれたのか、をたどりながら、

それとの対比で、横浜の〈スラム〉が「歴史の作法」⁽²⁾を問うフィールドとなり、〈スラム〉をめぐる読み書きをおこなうわたしたちは、〈スラム〉に問われている、との構えからの歴史批評を試みることとなる。

一 都市横浜の発展と娯楽の現在

横浜の歴史には、その時間を劃する重要な年がいくつあるという。近年、その区切りとしてみいだされた二〇〇四年には、「日米和親条約にもとづく開国から一五〇〇年目にあたります」(『ハマ発NEWS LETTER』第三号、二〇〇四年八月)と、特別な意味が観取されたのだった。横浜という都市に流れる時間に、いわば節^{ふし}を際立たせたこの『ハマ発NEWS LETTER』という広報紙の発行者は、横浜の歴史をどのようにみているのだろうか。

『ハマ発NEWS LETTER』を発行する横浜都市発展記念館は、つぎのようにその設立のねらいを述べている。「横浜は一八五九(安政六)年の開港により、国際貿易都市としての歩みを始め、数十年の間に日本有数の大都市に発展しました。／横浜都市発展記念館は、横浜がその原型を築き上げた大正・昭和の戦前期にスポットをあてながら、ひいては幕末の開港から現在に至る都市形成

の歩みを知っていただくために、今年「二〇〇三年」引用者による。以下同)の三月一五日にオープンした新しい展示施設です」(同前、第一号、二〇〇三年一〇月)と、開港に始まる横浜の発展としての都市形成史を展示するというのである。この広報紙はまた、紙名の由来について、「ハマ発」⁽³⁾とは、横浜都市発展記念館の略称であるとともに、横浜から全国に向けて発信するという意味でもあります。横浜をフィールドとしながら、近代日本の都市形成とまちづくりに関する情報を発信していきたいと考えています」と述べる。横浜はただ「日本有数の大都市」であるだけでなく、「近代日本の都市形成」の歴史の元とってよい位置にあり、かつその歴史がたどられるときに、そのたどり方の、いうならば指南役を任じうると、『ハマ発NEWS LETTER』は広報しているのである。この広報紙をとおして、横浜都市発展記念館がおこなってきた企画展示についてみるとしよう。

この記念館での開館以来の企画展示は、①関東大震災八〇周年「横浜リバイバル―震災復興期のまちづくり」(二〇〇三年三月一五日～六月二九日)、②みなとみらい線開通記念「横浜地下鉄物語―それは路面電車からはじまった」(二〇〇四年一月二四日～五月九日)、③開国一五〇周年記念企画展示「横浜・長崎 教会建築史紀行―祈

りの空間をたずねて」（同年五月二二日～八月二九日）、④
 企画展示「シネマ・シテイー横浜と映画」（二〇〇五年一
 月一五日～四月一七日）、⑤企画展示「地中に眠る都市の
 記憶―地下遺構が語る明治・大正の横浜」（同年九月三日
 ～二月一日）、⑥企画展示「昭和はじめの「地図」の
 旅」（横浜発東・北日本行き…二〇〇六年四月二九日～六月
 二五日、横浜発・西・南日本行き…同年六月三〇日～八月二
 七日）となる。

こうした企画展示は、広報紙の特集記事とも連携して
 いて、企画展が終了したあとでも、広報紙をみることで
 その一端を知ることができる。「横浜の都市鉄道―震災
 復興から地下鉄開通まで」（第一号、二〇〇三年一〇月）、
 「それは路面電車からはじまった…横浜の都市鉄道一
 〇〇年のあゆみ／みなどみらい線元町・中華街駅―駅に
 刻まれたまちの歴史」（第二号、二〇〇四年四月）、「天主
 堂の誕生―教会建築にみる開国と開教」（第三号、二〇〇
 四年八月）、「シネマのまち・横浜」（第四号、二〇〇五年
 二月）、「地中に眠る都市の記憶―地下遺構からのメッセ
 ージ」⁴（第五号、二〇〇五年一〇月）、「観光のヨコハマ」（第
 六号、二〇〇六年五月）——というぐあいに、横浜が都
 市として機能するために不可欠な電車や駅、開港場とし
 ての横浜にふさわしい天主堂をとりあげて、それらの展

開をたどることが都市発展史をあらわすことと示されて
 いる。さまざまな建造物や設備や施設のある都市がシネ
 マや観光の舞台となり、そこにとりあげられることが都
 市としての発展の証であるとされ、また、横浜の名声
 がどのように高まってきたのかを検証する場としてシネ
 マや観光が選ばれたのである。

また、都市ならではのメディアといってよい「ぴあ」
 をみよう。たとえば、『ぴあM O O K横浜（遊楽食買）
 スーパーカタログ』（ぴあ、二〇〇四年）では、誕生した
 ばかりの地下鉄みなどみらい線の開通を言祝ぎながら、
 横浜市長中田宏が「ようこそ、横浜へ！」との短文を寄
 せている。ここでは、「横浜は、開港以来、新しいもの
 を積極的に取り入れてきたハイカラな薫りが漂う街、海
 に向かって開かれている開放感あふれる街で、いろいろ
 な楽しみ方が出来る魅力あふれる街です」と紹介されて
 いる。二〇〇四年二月一日に、横浜駅と元町・中華街駅
 のあいだに地下鉄みなどみらい線が開通したことによ
 り、「都心方面からも多くの方が横浜へいらっしやるよ
 うになると思います」と市長は展望する。この地下鉄が
 開通するまでは、都心方面から横浜へゆくことができな
 かったかのような口ぶりの可否はともかくも、この年は
 しかも、「今からちょうど一〇〇年前の一九〇四（明治

三七)年、横浜にはじめて路面電車が登場しました」ときでもあり、さきにもたようにまた、「今から一五〇年前、一八五四(安政元)年に日米和親条約が横浜で締結されたことが想起できる。こうして、「今年「二〇〇四年」は横浜にとって、大きな節目の年でもあります」と確認された(『ハマ発NEWS LETTER』第二号)のであるから、なおのこと、都市横浜の時間にみいだされた節が、横浜が開港都市であること、そこは都市の魅力となること、人びとがそこにつどい楽しむこと、を際立たせるのである。

都市を遊樂の場としてだけみて、その都市をめぐるメディアとして地図があるとき、横浜という領域はそこでのように区切られるのだろうか。試みに、『ぴあMAP 横浜一鎌倉・湘南二〇〇二—二〇〇三』(ぴあ)をみると、そこには「横浜広域北部」という地図がおさめられている。その紙面に区切られた横浜は、というと、地図の左上は、高島台、沢渡、北幸、岡野までの地名が記され、左下は、西戸部町、境之谷、霞ヶ丘、三春台、庚台^{かえ}までがみえ、その右から中央下では、中村町、山手町、諏訪町が地図の下端となっている。すなわち、あとにみるようにつて(スラム)とみなされた相沢や根岸、あるいは浅間町や南太田町といった地域が、『ぴあ

MAP』のような都市メディアの世界では、横浜の境界領域としてあつかわれてしまうのである。

横浜を、その都市としての発展や、娯楽や観光のフィールドとしてみると、そこは開放感と魅力に満ちた都市となる。このとき都市横浜に(スラム)があつた(あるいは、ある)とは、ほとんどおもいもつかないこととなる。せいぜい、(スラム)は社会事業(あるいは、ヴォランティア)の対象にしかならないのである。

二 横浜をめぐる社会事業史の型

横浜をふくむ神奈川の社会事業史を代表する史誌として、『横浜社会事業風土記』(田中義郎、神奈川新聞厚生文化事業団、一九七八年)と『神奈川県社会事業形成史』(芹沢勇、神奈川新聞厚生文化事業団、一九八六年)がある。それらのなかで、(スラム)がどのように記されているのかをみよう。

『横浜社会事業風土記』をあらわした田中義郎は、一八九三年に生まれ、神奈川県や横浜市の職業紹介所、神奈川県^の社会課や厚生課などに勤務した官吏であった。彼はその著述の動機をつぎのように記した。「昭和四十三「一九六八」年八月に引退してから、つれづれのあま

り私は、かつて市民の生活に密着して活動し、多くの業績を残した横浜社会事業の終戦までの資料収集に手をつけて見る気になった」（「あとがき」ところ、「明治五」「一八七二」年から昭和二十年八月までに横浜で開設された二二八の社会事業施設のそれぞれについて、その生い立ちと事業内容の概要を取りまとめ」（「はじめに」）て、それを本書として上梓したという。田中が横浜社会事業の歴史を記そうとしたとき、それは「はじめに」で概観されているように、その「発達過程」をたどることとなり、また「あとがき」に謝辞が記されているように、「平野先生の「白い峰」からは多くを引用させていただいた」ことでそれが可能となったのである（平野の『白い峰』については後述）。

田中義郎はその著書で、横浜社会事業史の発展過程を、一九世紀後期の一八七〇年代から二〇世紀中葉の一九四〇年代まで、一〇年ごとに時間を区切って記している。そして各年代に設けられた「補遺」をみると、一八七〇年代のそれには「底辺庶民の窮乏」、一八八〇年代のばあいには「横浜初期の児童教育」というぐあいに、それぞれにタイトルがつけられている。二〇世紀における横浜の社会事業を一〇年ごとに概観する本書では、各補遺のタイトルをとおして、一九一〇年代のところでは「横

浜の社会事情」、一九二〇年代には「関東大震災と横浜社会事業」、一九三〇年代については「横浜の失業救済事業」と論点が示されたこととなる。

一八八〇年代の「横浜初期の児童教育」では、（スラム）についての記述がみえる。一八七三年に神奈川県行政区域画があらためられて、「横浜の行政領域は、本牧、根岸、北方、中村、太田、吉田新田、野毛、戸部方面にまで拡大されること」となった。それらの「横浜の新城は、小作農、小商人、労働者など低所得階層の居住地区であり、これらの住民たちがすべて子弟の学校教育に無関心であったとはいえないにしても、生計上から子弟を通学させることが困難であったものも少なくなかったのである。とくに、中村、相沢、堀の内、太田などに形成されたスラムに住む半失業の生活困窮者は、食うことに追われて子弟の教育どころではなかった」と、田中は収集した資料にもとづいて考察されたであろうかつての横浜の様相を記している。開港後「初期」の横浜にすでに（スラム）があった、そこは教育を充分にうけることができな生活困窮者が住む地域だった、それは中村、相沢、太田などにあった、と示されたのである。

一九〇〇年代の「新生社会事業施設の横顔」にとりあげられた相沢託児園（一九〇五年に二宮わかが開設）の項

には、その園がおかれた相沢の「土地柄」をあらわす素材として、キリスト者田中亀之助の一文が引用されている。ただし、ここでの典拠は二宮わかかの事業を継いだ平野恒子が著した『白い峰』（白峰会、一九五九年）であり、引用はそこからの重引であることをまず確認しておく。その引用部が示す内容について田中義郎は、「この一文は、当時の相沢地区の特色をよく描いている」と、その描写の精度を高く評価した。そうした実態がある場所に、「二宮が新施設をあえて相沢託児園と称したことは、その地区の薄幸の児童を目標としたということであり、二宮の社会事業がきれいごとでなかったことを物語っている」と、田中は、〈スラム〉の悲惨さとの対比で、二宮わかかの事業と彼女の精神の高邁さを讃えたのである。

また、『横浜社会事業風土記』の、一九二〇年代の「新生社会事業施設の横顔」にみえる私立中村愛児園（一四二四年に「二宮わかか改称」をめぐっても、田中義郎は『白い峰』からの引用をおこなっている。それは、『白い峰』の「よみがえる思い出」という章にある「南京虫の巣」の一部である。引用した田中にはそこにある記述をふまえて、「このことは、当時民間社会事業施設がどんな状態におかれていたか、そしてそれを改善するのに経営者が

どんなに苦勞しなければならなかったのか、ということ物語っている」と記した。ここでもやはり、慈善家の労苦を示す証しとして、社会事業施設の悲惨さが指摘されたのである。

平野恒子が「南京虫の巣」として記した原文の一部を、ここに引用しよう——「この桐の机の前に坐ると、必ずかゆくなり、家に帰ると顔がはれたり、手がはれたりして、一晚中硼酸（ホウサン）で冷やしたこともありまして。小さい南京虫がこの机の中に巣くっていて、昼間でもはいだしてきて、まだ免疫になっていない私をさすのです。また、大谷さんの奥さんがお茶を出してくださいと、そのお茶わんの中に、ノミがピョンピョン飛び込んでしまうこともありまして。「どうしたらよいのですか」と聞きますと「先生、すぐ飲んでしまうのですよ」と教えてくれました。これでは住み込んでいる職員もことも大変だ、一日も早く前園長の希望どおり、愛児園の新築を始めなければだめだと心をきめました——田中は引用にあたってこの冒頭に、「くちはてたバラックの中村愛児園で」という、原文にない記述を読者にことわりなく書きくわえている。南京虫の巣は、「くちはてたバラック」になくってはならない、というかのようだ。

この平野の『白い峰』は、『巷説かながわの社会事業史』

(巷説かながわの社会事業史刊行委員会編集・発行、一九八六年)においても、参照され引用されている。そこでは社会事業の展開を記すなかで横浜の(スラム)について言及するとき、たとえば、横山源之助の著作とならべて『白い峰』をあげ、また、中村愛児園を記すにあたって、平野の著作からさきにもみた「南京虫の巢」を引用し、その内容を「スラムの中の、これはほんとうの姿である」と断定したのであった。

このように、横浜、そして神奈川の社会事業史を記すものたちは、平野の著作である『白い峰』を、いわばその領域での正典としてあつかってきたのである。平野恒子の慈善事業が賞賛されるとともに、彼女の記したところが、過去の確かな現実として定着してゆくのである。

三 閑却された正典の出版

すでにみたように、『白い峰』から相沢の記述を引用するとき、それはいわゆる孫引きとなってしまうのだから、(スラム)について知ろうとするのなら、『白い峰』の出版をたどって、その原典にあたるのが歴史記述者の務めとなる。そのまえにまず、横浜社会事業史の正典としての『白い峰』には、なにが記されているのかをみ

るとしよう。

平野恒子の『白い峰』では、「よみがえる思い出」という章のなかの、「残された記録」という節に、「相沢託児園というところ」がつづられている。「相沢託児園の環境については、昭和七(一九三二)年一月二十日、基督教時代社発行のリーフレット第八号に、田中亀之助先生のお書きになった「横浜慈善会病院の創立者、愛の使徒稲垣女史」についても、よく知ることができます」との紹介のうえで、つぎのように記されている。

「横浜の山手、地藏坂を登ると、一条の道が世界的に名高い根岸の競馬場へと通じている。此の道は競馬場に行幸遊ばされた明治大帝が幾度か御通過遊された処である。競馬場の近く、相沢と云はれている一劃は社会の落伍者たちが自然に寄り集って形成されたスラム部落なのである。朝早くこの町を通る者は汽船の汽缶(ボイラー)掃除に出かける俗に「かんかん虫」と呼ばれる少年たちに出会ふであらう。汽船に出かけるペンキ屋、波止場人足、立ちん棒(タチンボウ)、磨き屋、紙屑拾ひ、靴、雪駄直し、さう云った種類の人々が主に住んで居る。夏の夜の景気の好い、賑かなのに引き換え、秋から冬にかけて雨でも二、三日間続いた時には、その生活はかなり惨めなものである。起きると腹が空(マユ)から寝ていやうと云った調子、四

畳半一室に親子六、七人が雑居寝の生活である。薄暮、人の顔がみえなくなる頃、借着であらう盛装した娘が何処かへ出かけて行く。国際都市に珍らしくない恥づべき稼ぎに一家がやっと支へられ、陋巷には混血児が殖えてゆく、それは上の部、姉も妹も借金の為めに苦界に身を沈める者もすくなくない。何んという人生悲惨のきわみではないか——これを受けて平野も、「このような姿は私が園長に就任したところにもよく見られました」と記して、田中亀之助と自身が記した内容の信憑性を高めている。それぞれの記述は、相互に説得力をあたえあっているということだ。田中亀之助による「愛の使徒」をめぐる記述は、どのように〈スラム〉とかわわっているのだろうか。

現在、田中亀之助の『回心物語』（教文館出版部、一九三三年）は、国立国会図書館のマイクロフィッシュで見ることができ（YD₅-H-特216.45）。また、横浜に縁のあるところでは、日本キリスト教団横浜上原教会百年史編集委員会による『横浜上原教会史料Ⅰ』（一九七〇年）に収録された『日本キリスト教団横浜上原教会百年史編集ニュース』No.12（一九七〇年二月二二日）をみることもなる。

後者の記述は、「回心物語」から／横浜慈善善会病院の

「創立者／相沢貧民窟の愛の天使」と始まるとすぐに、さきに見た「横浜の山手、地藏坂を登ると」へと続く。記されているところは、たとえば、根岸競馬場をめくって、『白い峰』にある「明治大帝が幾度か御通過遊された処」が、『回心物語』では「天皇陛下が幾度か御通過遊ばされた処」となっていたり、いくつかの語や章句が『白い峰』になかったりと、両者のあいだにはいくらかの異同があるが、そのちがいがおおきな意味をもつほどではない。

みるべきは、『白い峰』が引用を終えたところ以後の記述である。『回心物語』ではつぎのとおり、〈スラム〉の描写が続いていた——「表通りには貴顕紳士の馬車が、自動車、競馬場にと急いで行く。その裏通りには、病苦に、貧のどん底に喘いでゐる人々の多いのに驚かされる。貧民街に於て最も悲惨なのは、大家族の狭い室のなかに病人の横はつてゐることである。一家粥をす、つて生きて行くことが出来ても、医薬までには彼等の手はたうてい届かないのである」——と、競馬場におもむく表通りの貴顕紳士と、その裏通りで喘ぐどん底の貧者との対照が描かれている。

そして、その貧民街への憐憫のこころをだれの眼にもみえるようにと、日夜その熱情を悲惨などん底へとそそぐ稲垣寿恵子の表彰に『回心物語』の記述は努めるので

ある——「時は明治二十二「一八八九」年、翌年の物価暴騰と悪疫流行の際には、貧民救助の爲めに、当時横浜に於けるスラム部落の中心地相沢、扇町、戸部の三ヶ所に施米所を設け、施米、施飯、金品の給与などを爲したが、その恩恵に浴したる者約三千人の多きに達したと云ふ。明治二十五年には相沢の貧民街の山の上に、八百坪の土地を購入して九十三坪の二階造りの堂々たる赤く塗られた『根岸の赤病院』が建築せられた。横浜の貧民^{マゼ}を取りて此の病院がどれ程有難いものであつたかわからない。大正二「一九一三」年済生会に寄附せられ、今の根岸済生会病院がそれなのである。是れは恐らく日本に於て基督教婦人たちが協力して建てたる最初の無料療養院ではあるまいか。兎に角、社会事業に対して理解のない四十年前に於て外国人の同情的援助が多少あつたとは云へ、創立者でありまた会長であつた稲垣女史の苦心は並大抵のものではなかつたことは想像に難くない。／聖経女学校の教師であり、またあの多忙な伝道の働き傍ら、時を作つて貧民街に病者を慰問し、施療券を与へ、重病者を入院せしむるなど、殊に身も心も寒い歳末にでもなれば、自ら貧家を訪れて米を、衣類を、餅を配布などせられた。貧民街の人々は稲垣女史を『赤病院の先生』と呼び、その後姿を拝むほどで、女史こそは此の

貧民街に於ける愛の天使であつた——との絶賛が『回心物語』のなかでくりひろげられていた。

根岸済生会病院のもととなった根岸慈善病院をつくつた稲垣寿恵子を讃えるなかで、田中亀之助は横浜の（スラム）をとりあげていた。「此の貧民街に於」いてこそ、彼女の「愛の天使」としての聖性も高まるというわけだ。

ここで、『横浜上原教会史料Ⅰ』によつて、『回心物語』とその著者である田中亀之助についてみておこう。『回心物語』はB6判のペーパー・バックスで、活版、本文一三七頁の小冊子で四〇銭、一九三三年一月に教文館から発行された。田中亀之助は、『平田平三伝』などの著書がある、横浜教会の牧師である。

表紙に、「CHRISTIAN CONVERSIONS IN JAPAN」と記された『回心物語』の序文には、「国民生活のうちに基督教が与へたる感化は、見える部分より見えない部分に於て、広く且つ深い。禁酒、廢娼などの矯風事業より孤兒院、慈善病院、隣保、托兒院などの社会事業は、概して基督を信じて、その救を体験したる人々に依りて創設せられ、維持せられ、發達せられて来たると云ふても取て過言ではあるまい。「中略」私は本書に於てさう云つた人物十九名の回心動機と、彼等が基督を信じて後の祝福せられたる生涯と、また世に貢獻せられたる生涯と、

また世に貢献せられつゝある事業とを書いた。此れ既に『基督教時代』誌上に於て、私が試みたところのものであるが、紙面の都合にて詳細にわたることが出来なかつたのを、全部新しきものに書き改め、新装して世に送り出すことにしたのである」と記されている。

ここにいう一九名のなかで横浜にかかわる人物は、稲垣と吉田とみ子（満州伝道、聖經女学校教師）と有馬四郎助（刑務所長）とのこと。稲垣寿恵子（一八六〇年生—一九三一年没）と二宮わか（一八六一年生—一九三〇年没）は、ともに同時代を社会事業家として生きたひとである。田中亀之助は、「矯風事業」「社会事業」の動力にキリスト教の信仰をみていた。そうした事業に功績をのこした人びとの列伝を書くときに、彼は二宮ではなく稲垣を選んだ。有馬四郎助などの「社会事業家と関係の多かつた牧師山鹿旗之進は、稲垣と二宮について」次のように評している。稲垣は漢学の造詣、二宮は洋学の修練、稲垣は教会内の活動、二宮は教会外の活動、両者ともそれぞれの個性と特徴を發揮したと⁵いう。両者にはかくも対照の評価がなされている。いや、明確に対照となる位置におかれて、ふたりは社会事業家として評価されていたといった方がよいのだろう。

稲垣か二宮か、あるいは平野か——だれを賛美するの

かの文脈がちがっても、ともかく社会事業家の仁慈を顕彰するときには、田中亀之助の観取した〈スラム〉としての相沢をめぐる記述が必要となった。参照され引用されて、くりかえし横浜社会事業史に掲載されてきたその〈スラム〉の記述は、いわば表彰台にだれが立とうともその功績を讃える万能の鍵となったのだ。かなり惨めな生活を送る「社会の落伍者」は、誉め讃えるべき慈善をおこなうものたちの侍女や下男となった。表彰されるものたちへの賛辞がより詳細になってゆくとしても、「社会の落伍者」をめぐる記述は型どおりに反復されるばかりとなる。「落伍」というとき、それは、社会のなかで下位あるいは後景には、べつな集団や列があると観取されたことの表明である。しかし、それはどういう事態のあらわれなのか、そこでの人びとの生はどのようなになっているのか、が問われることはほとんどなかったし、なにより、異化された集団や列を生じさせる政治がなにか、社会のなかに「落伍者」をみつける歴史の読み書きの正統性がなによって保証されているのかを、歴史を記述するものがみずからに問うことはむづかしかったのである。

四 隠れた正典の異版

さて、田中亀之助の『回心物語』（一九三三年）から平野恒子の『白い峰』（一九五九年）を経て、田中義郎の『横浜社会事業風土記』（一九七八年）にまで受け継がれた相沢をめぐる記述にみられた、汽船の汽缶掃除にでかける少年たちをおつてみよう。彼らの俗称「かかん虫」といえば、「ぼくの生れた当時の両親は、横浜の根岸に住んでいた。その頃はまだ横浜市ではなく、神奈川県久岐郡中村根岸という田舎だった。家の前から競馬場の芝生が見えたということである」（『忘れ残りの記』一九五五年執筆開始）と、みずからの出自を回想する吉川英治の文章にゆきあたる。彼の『かかん虫は唄ふ』（初出は一九三〇年—一九三一年。春陽堂の日本小説文庫一四二として一九三二年に刊行）である。かかん虫とは、「鉄はたたくが、目も鼻も耳の穴も、まっ黒になって、船のサビ落しをやる労働者の名だ。或いは、港の船を目あてに、ペンキ塗りでも何でもやる自由労働者のことと通用してもよい」と示されるものたちである。「かかん虫のトム公は、領土の人民を見廻るように、時々、自分の住んでいるイロハ長屋の飢餓をさがし歩いた。／彼は、

貧民街の同胞たちから、長屋のプリンスの如く人気があった」。それというのも、トムは「大人になったら、おれはかかん虫の指揮者になりたい、病人や老人はあふれさせないようにしてやる」との意思を強くもつ気概のある少年だったからだ。

この『かかん虫は唄ふ』には、トムの「いちばんのお花客先は、横浜の船渠会社」だと示したうえで、「まだ菜つ葉いろの職工さえその門に見えないうちに、全市のかかん虫は煙のように高い煉瓦塀の下に蝟集する。わらじ、ポロ靴、ゴム足袋、木靴、洋装、和装、裸装、あらゆる労働的色彩が睡眠不足な蠢動をしている」という描写がある。また、「あんな、かかん虫どもの集まるところへ行ったら、バスト菌にとっつかれる」と、都市横浜をくりかえし悩ました伝染病と（スラム）を結びつけるような記述や、「かかん虫のトムっていうんだ」と名乗りをあげた彼に対して、「トム？……混血児かい」との応答にみられる、「スラム」での「恥づべき稼ぎ」の結果として増殖するという「混血児」をおもいかべさせる場面がある。いずれもすでにみた（スラム）をめぐる記述と同様ではあるが、しかし、横浜都市史であれ、横浜社会事業史であれ、それらがこうした吉川の記述を引用したり、さらにはそれらをふまえて歴史の読み書き

を論じたりすることは、まずなかったといつてよい。⁽⁸⁾

「ピカレスク・ロマン」の現代悪漢小説とジャンル分けされてしまう『かんかん虫は唄ふ』よりもむしろ、「四半自叙伝」との副題がつけられた『忘れ残りの記』の方が、歴史研究者にはあつかいやすいのかもれない。同書から、「相沢の貧民窟から奥の丘には、日本人墓地やナンキン墓などもあって、不当に社会からへだてられてゐる人々が低地に部落をなしていた」のあたりを、横浜の〈スラム〉のようすを回想した記事としてひろうことはたやすいだろう。吉川は同書で、かつての自著にもふれている。「ぼくの旧作に、かんかん虫は唄う」という中編物がある。あの「いろは長屋」とか、カンカン虫のトム公などは、つまりぼくの逍遙した所の幼児の記憶が生ましめた幻想で、多少のモデルは有って書いたものだが、トム公は、ぼくではない」というのだ。幻想だともみずから表明されてしまつては、『かんかん虫は唄ふ』のあつかいは、過去の「事実」の実証を管掌する歴史研究者の手にはあまる。さきの引用箇所にすぐ続いて、「その極貧窟のいろは長屋から、すぐ一側表の通りには、山手の異人街から根岸競馬場やナンキン墓方面へ通じる一すじの町がある。その相沢と呼ぶ町通りにも、ぼくは当時の風俗詩的な思い出を幾つか新たにすることができ

る。わけて鮮やかに思い出せるのは、在留シナ人の葬式と、明治天皇行幸の鹵簿であつた」と吉川は記している。横浜で職務を果たしていた牧師による（おそらく）目撃記録、横浜で生まれ育つた作家による回想と創作がある。歴史を記すものたちによる史料の精査とは、複数あるテキストを照らしあわせて、そのなかから歴史の「事実」を確定することが慣例となつていた。目撃記録と回想や創作をならべたときに、とくに創作はフィクションであることを理由に、歴史の読み書きをめぐるテキストとしては遠ざけられてきた観がある。フィクションをめぐる手法は、いまだ、歴史学にはなく、〈文学〉にゆだねられているのだろうか。⁽¹⁰⁾

五 横浜をめぐる社会事業史の自覚

『神奈川県社会事業形成史』の著者である芹沢勇は、一九一一年の生まれである。大学卒業後に横浜市の課長、区長、民生局長、収入役を勤めたあと、鶴見大学短期大学部の教員となつた。その著書である『神奈川県社会事業形成史』では、第一章「§2 近代恤救」の「(1)明治窮民」において「i) 浮浪と底辺地帯」として〈スラム〉をとりあげている——「横浜市の底辺層の増加も勢

を増し、やがて明治中期には市内処々に集団化し、それが貧民窟地域の形成につながっていった。横浜の貧民層は現在中心街となった埋立地吉田新田を追われ、次第に三つに分かれて西進した。一つは山手居留地に続く旧根岸競馬(現森林公園)手前の相沢(現中区山元町)台地と、その台地下の中村川に沿った三吉、中村町(現南区)への雁行である。そして第三は現在の野毛山公園、東丘から先への西進で、やがて太田村富士見、庚耕地(現南区南太田、庚台)へ集落化した」――芹沢は、一九世紀末から二〇世紀初にかけて横浜には三地域に(スラム)が形成されていったと指摘した。

芹沢は、「相沢、中村地区について田中亀之助(横浜上原教会資料)および吉川英治(忘れ残りの記)が、当時の事情を具体的に伝えている」とみていたのだから、彼は、前述の横浜の(スラム)をめぐるテキストのなかで、目撃記録と回想をならべて等価にあつかったといつてよい(ただし、引用の仕方にくらか欠点があるが)。横浜ないし神奈川の社会事業形成史のその始まりに(スラム)形成をみていた芹沢は、どのように歴史を記そうとしていたのだろうか。

同書の「課題」において芹沢は、「社会事業史は与える側からの記録であり、また反対に受ける側はいわゆる

「無告の民」で訴える術はほとんどもっていなかった」とその自覚を表明している。しかも社会事業にかかわる「記録資料で顕在するものはまた限られて乏しい」という史料をめぐる制約と、「社会事業関係は「戦後あいついで刊行された各市町村史において」一部を除き余録的扱いが多い」といった歴史の認識や記述にかかわる不充分さも彼は指摘している。社会事業の形成という歴史をめぐる課題が、どの位置から、なにによって、どのように、それを記すのかと掲げられたとき、その歴史を記す「構成と方法」として、「社会事業史には本来事業を受けられる者の立場から書かるべき一面をもつ」と、前述の、どの位置から記すのか、が強調されている。しかしやはり、なにによって、にかかわる「資料の制約」があり「これは果たせないため」、不備ではあるが「可能な限り対象者の実情に及ぶようつとめた」と歴史記述の指針を明示していた。

これは、救済や恤救じゆつきうの対象となる「浮浪と底辺地帯」や「底辺層と底辺労働」の歴史をどのように記すのかをめぐって、彼の苦衷が吐露された場面といえよう。とはいえ、歴史記述という作業をおこなうにあたって、このころのうちに苦しさや苦さを抱えていると明かすことが重要なのではない。「対象者の実情」というとき、その「対

象者」も「実情」もそれらは、なにものとして、どのよう、つかむのかを考察しなくてはならない。さらに分節化していえば、わたしたちはどのように対したときに「象」がわたしたちの眼前にあらわれることとなるのか、それをめぐる「実」をどのように設定するのか、が歴史の読み書きをめぐる要諦なのだ、とわたしは考えるのである。

芹沢勇の『神奈川県社会事業形成史』を手にして、その第一〇章「援護」の「§2 住宅・スラム改良・隣保事業」をみれば、そこには、一九二三年の関東大地震による震災のその後、「同潤会により南太田を食谷戸（庚耕地）、大原耕地（保土ヶ谷寄り）、富士見耕地」が設定地区とされた「スラム改良計画」の記述が展開している。それを読むわたしには、「スラム改良の目的は即住宅改良ではなく、当然居住者の生活改良が究極目的にならないけれども」と記されてしまうことが、ひっかかってしまうのである。とりわけ、「当然」という語をもちいる芹沢の〈スラム〉への対し方に、わたしの身はすぐんでしまうのである。

歴史を記述するものが利用する史料は、過去の痕跡の、そのごく一部にすぎない。歴史記述者は、そのかぎられた量の史料によって、それらが対象としているものたち

やことがらの「実情」を記そうとする。このとき、たとえば、社会事業史を記述するものは、その歴史のあるべき記し方を自覚すると示したうえで、その事業を受けるものたちを、社会の「底辺」に位置づけてしまったり、まっすぐに直すべきまがった習慣に泥ん（な）でいると貶視（へんし）してしまったりしてきた。これは、社会事業史がその「事業を受ける者の立場」から記されているからなのだ。社会事業の内実が注意深く問われず、社会事業を場とした政治を考える用意がないままに、社会事業史が記されるのならば、そこでは、〈スラム〉は社会事業の客体にしかならない。そこに住むもの、そこでの暮らしは、社会事業とのかかわりでしか、記されることはないのである。

おわりにかえて

横浜の歴史のなかの〈スラム〉をめぐるわたしの読み書きは、ひとまず、すでにまとめてみた。そこでは、できるだけ横浜の〈スラム〉についての史料をあつめ、それらをもとに、横浜の〈スラム〉がどのようにみられ、あらわされてきたのかをたどってみた。横浜の〈スラム〉をめぐる表象を、あれやこれやと考えたところを示したものとなった。

過去や歴史を表象としてとらえてそれを示すことは、過去や歴史の「事実」や「実情」を再現する実証よりはたやすいとみえるかもしれない。ただし表象をめぐる作業はさらに、①その書かれた歴史にどのような他者が想定されているのか、②表象とプラテイク（慣行としてのふるまい）をめぐる問題をどのように論じるのか、が問われることとなる。

注

(1) 二宮宏之「歴史の作法」(二宮ほか編『歴史を問う 四 歴史はいかに書かれるか』岩波書店、二〇〇四年)を参照。

(2) この横浜の(スラム)をめぐるわたしの論述は、すでに公表した「都市の縁辺を考える―二〇世紀初頭の横浜スラム再考 上・下」(『彦根論叢』第三三五号・第三三六号、二〇〇二年三月・同年六月)、「都市の縁へ―二〇世紀初頭の横浜というフィールド」(小林文広編『都市下層の社会史』解放出版社、二〇〇三年)、「都市周縁に向う感知の力―二十世紀初頭の横浜」(中野隆生編『都市空間の社会史―日本とフランス』山川出版社、二〇〇四年)を参照。

(3) この開港を始原とする横浜の歴史意識については、わ

たしの「始原の歴史学を批評する―想起される横浜の過去について」(『Quadrante』No.3、二〇〇一年三月)を参照。

(4) 近年のこうした「記憶」の語の使われ方がわたしには気にかかる。同紙同号のどこをみても、なぜ地下遺構と「都市の記憶」が結びつくのかを説明する記述はみられない。横浜をめぐる「記憶」の議論については、わたしの「横浜歴史という履歴の書法」(阿部ほか編『記憶のかたち―コメモレイションの文化史』柏書房、一九九九年)を参照。

(5) 芹沢前掲書『神奈川県社会事業形成史』。同書には稲垣と二宮の肖像写真がおなじ頁にならべられている。

(6) ここでの引用は、講談社の吉川英治歴史時代文庫七七(一九八九年)からおこなった。

(7) ここでの引用は、同前文庫八(一九九〇年)からおこなった。

(8) 挿絵でいどにあつかわれた例をあげると、『開港のひろば』第八一号(二〇〇三年七月三〇日)の表紙で「企画展 遊楽都市 横浜―芝居・映画・エトセトラ」にかかわって、一九三一年の「かんかん虫は唄ふ」スチール写真」が載っている。横浜の相沢をめぐる記述やその読み書きについてまだわたしはまとまった論考を發表して

いないが、ひとまず、二〇〇一年二月一六日に一橋大学で開催された「歴史と人間」研究会例会で、論題「貧民を書くこと―横浜の縁辺から考える」として報告した。

(9) 畑山博「かんかん虫は唄うの旅」(一九八三年。注(7)前掲書所収)。

(10) たとえば、前田愛『都市空間のなかの文学』(筑摩書房、一九八二年)の「獄舎のユートピア」における『最暗黒の東京』をめぐる読み方を参照。

(11) 厳密にいうと、南太田が横浜地域に編入されるのは一九〇一年のこととなる。この南太田をめぐる認識のレッスンとして、わたしの前掲論文「都市の縁辺を考える―二〇世紀初頭の横浜スラム再考 上・下」を参照。

(12) この〈他者〉の問題については、ひとまず、わたしの「記憶から歴史へ／歴史から記憶へ」(矢野敬一ほか『浮遊する「記憶」』青弓社、二〇〇五年)を参照。

(13) 二〇〇一年一〇月六日に日仏会館で日仏歴史学会が主催した日仏シンポジウム「都市史の新展開―日常性・ネットワーク・表象」で、論題「二〇世紀初頭の横浜の都市下層世界像」を報告したときに、二宮宏之につめよられた論点が、これだった。この点についての考察は進展していないが、論をすすめるにあたって二宮が示した文献が、そのとき未刊行の福井憲彦「テキストとブラティ

―クの間―あるいは史料・現実・想像力」(二宮ほか編前掲書所収)だった。